

—探求・川にちなんだ万葉集の歌—

万葉の川心 第37回

横浜市立綱島小学校教諭 澤井 園子

いまだ國を勘へざる相聞往来の歌（巻第十三 三五四三番歌）

室草の都留の堤の成りぬがに

児ろは言へどもいまだ寝なくに

嘘。幼い頃、「うそをつくのは悪いことだ」と誰もが言われる。しかし、ある時、思わずうそをついてしまう。その後でよかったのではないかと思う。それは、自分を守るためではなく、相手を傷つけないための嘘だ。

ある時、叔父が私に聞いた。

「君が、もし不治の病にかかったとして余命幾ばくもないとなったらそのことを知りたいと思っかい。」

「もちろん知りたい。」そのときはまだ若く、常に本当のことを知りたかった。自分の生い立ち、両親の過去、何もかも真実が正しいと思いきみ、大人の嘘など辟易していた頃だった。深いため息の後、叔父は言った。「私はそうは思わない。家族みんな嘘をつくんだ。もちろん本人だつて自分の死期くらい悟るさ。それでも本人も気づかぬ振りをする。そうして最後の最後までお互いが嘘をついているとわかって死んでいくのが家族じゃないのかねえ。」言葉に詰まった。病名を知って、なお、家族とともに戦うという生き方もある。単に告知の問題ではなく、そのときつく嘘の大きさと愛の深さを考えたら足がすくんだ。その人のためにずっと嘘をつき通すことなんてできるのだろうか・・・返事ができずにいた。叔父は黙ってスコッチをグラスに注いだ。

「室草の都留の堤ができあがるように、あの子は恋がみのりそうに言いながら、まだ一夜の共寝を許そうとしないものを。」嘘には艶事の嘘

もある。思わせぶりに歌を贈り、袖を振れどもなびかない恋の駆け引きに嘘はつきものだ。ただひたすら「愛しい」と押す情熱もうれしいが、わずかの仕草ややさしい一言に思いを見いだす楽しみもある。「今度会えたら」のその一言にすがってしまふときもある。もちろん、それもやさしい嘘なのだが。「うそも方便」に、「うそから出たまこと」。口について出た言葉は、人の心を旅して歩く。魂を宿して、思いがけない力をもっていく。大人の女か否かは、一生つき通す嘘をもっているかどうかで決まると、ある演出家が言った。嘘なんて嫌いだった。でも、嘘にはどうしようもない思いややさしさが隠れていることもある。大人になるのは楽しい。そして、少しせつない。「都留の堤」は所在未詳だが、山梨県北都留郡上野原町の鶴川の堤ではないかといわれている。堤が出来上がるころのように、わくわくする思いで待っている。なのにまだ共寝が許されない。川の流れだけでなく、堤もまた恋の舞台になるようだ。

あれから、何年になるだろう。叔父はこの世を離れた。その最期は本当に家族に愛されて、太く短く人生を生きた。今、遺してくれたさりげない言葉の数々が宝物として心に残っている。



山梨県北都留郡上野原町の鶴川